

# 現代ドイツにおけるピアノ学習初期の子供のための 指導法についての一考察

中山孝史・森みゆき\*

## The new piano teaching method to the young children in Germany

Takashi NAKAYAMA and Miyuki MORI

### はじめに

フリッツ・エモンツ Fritz Emonts (独, 1920 ~ 2003) が著した注目すべき2冊の楽譜がある。それぞれ1958年に出版された *Erstes Klavierspiel, Band 1*<sup>1</sup> と1992年に出版された *Europäische Klavierschule, Band 1*<sup>2</sup> である。これらの2冊の楽譜は、エモンツがピアノを初めて学習する人たちのために書いた楽譜であり、後者は、出版の翌年1993年にドイツ音楽出版賞 (Musikeditonspreis) を受賞している。これら2冊の楽譜を比較してみると、約30年間のドイツにおけるピアノ学習初期段階における教授法の変化を見ることができる。

エモンツ自身が、*Europäische Klavierschule* の巻頭でこの楽譜のことを新しい版と述べているが<sup>3</sup>、これは1958年出版の *Erstes Klavierspiel* をもとにしているということである。また、*Europäische Klavierschule* の編集者であり、作曲家でもあるライナー・モールス Rainer Mohrs との対談の中でも<sup>4</sup>、*Europäische Klavierschule* は *Erstes Klavierspiel* をもとに書き直した、と述べている。収められている曲を比較してみても、重複している曲が多く、エモンツが1958年の楽譜をもとに、新しい楽譜を書いたことは容易に推測できる。

本論文では、まずはじめに *Erstes Klavierspiel* を旧版、*Europäische Klavierschule* を新版とよび、ピアノ学習の初期段階における教授法を比較していきたいと思う。次に、1990年代以降に出版されたピアノ学習初期段階のための様々な指導書を中心にして、現代ドイツにおけるピアノ学習初期段階の教授法を考察していきたい。

### 1 エモンツの旧版と新版にみる相違点

新旧2冊の楽譜は、手にとった者に全く違う印象を与える。旧版は、ページ地に黒い文字でタイトルが書かれた表紙で、中を開けると、ごく普通の楽譜だけが印刷されたものである。巻頭のページには、初めて学習する人のために、ト音記号やヘ音記号、全音符や2分音符、休符や終止記号などの説明が書かれている<sup>5</sup>。これに対し、新版はまるで絵本のような楽譜である。新版の絵は、現代ドイツの絵本作家アンドレア・ホイヤー Andrea Hoyer (独, 1967 ~) によって描かれている。ホイヤーはベルリン芸術大学 (Hochschule der Künste in Berlin) でグラフィックデザインを学び、音楽を題材にした絵本等をかいており<sup>6</sup>、1999年にはドイツ音楽出版賞 (Deutscher Musikeditonspreis) を受賞している<sup>7</sup>。ホイヤーの絵に彩られた新版の楽譜は、まるで絵本のようにあり、楽譜を読めない大人や子供でも、手にとってみたくなるようなものであり、時間を忘れてしまうくらい楽しめるといっても過言ではないように思われる。絵の中に、あたかも詩や物語のように楽譜が記されていると表現したらよいであろうか。例えば、64ページの「羊飼いの歌」*Hirtenlied* という曲のページを例にあげてみたい。静かな山の夜、空には1つだけ大きな明るい星が輝いている絵の中で、羊飼いのおじいさんが、何十匹という、もう目をつぶって夢をみている羊たちに囲まれて、空の星を見上げている。絵の中の星は真っ白である。おじいさんが歌っている歌「羊飼いの歌」が、白い五線譜と白い音符、白い歌詞で書かれている。一般的な五線譜の楽譜に慣れている人であれば、白色で印刷された五線譜に程度の差こそあれ、驚きがあると思う。このページを見ると、現代の斬新なデザインに囲まれている私達でも、「五線譜は黒い」という固定観念があるように思う。全体の絵のデザインを邪魔しないように、そして効果的に五線譜を取り入れられている新版の構成に、新しい感覚を感じる。そして同時に特筆すべきことは、ホイヤーの絵が、楽譜に書かれた学習すべき要素を、的確に絵の中

\* みゆき音楽アカデミー 主宰

で表現しているということである。この点において、ホイヤーの作品は、ただの挿絵の域を超えている。また、これから考察していく特徴以外にも、子供にも分かりやすいような鍵盤の図がついていたり、自分で伴奏を考えようという課題があったり、「蛇遣いの曲」Der Schlangenbeschwörer といったイスラムのイメージの曲や「タンゴ」Tango などの曲に見られる非西洋的な曲を取り入れている、といった相違点があげられる。

## 2 新しい指導法「楽譜なしで弾く」(Spiel ohne Noten) という考え方

新版は、薄い黄色のページと白いページに分かれている。31 ページから最終ページまでは、一般的な楽譜のように白い紙に印刷されているが、8ページから30ページまでが薄い黄色の紙に印刷されている。この8～30ページこそがエモンツ自身が強調したかった新しい教授法である。旧版の最初の曲は、新版の31ページの最初の曲である。エモンツが主張している新しい教授法の大きな特色は、楽譜を読む以前の教授法である。このことについて、エモンツ自身が新版の巻頭で、「子供達がピアノを弾くということが楽譜を読むというプロセスと関連づける前に、ピアノに親しみ、耳の感覚を鍛えることが必要である<sup>8</sup>。」と述べている。その具体的な方法として、エモンツは2つの方法を挙げている。それは「黒鍵から弾き始める方法」と、「知っているメロディを記憶を頼りに弾いてみる方法(探り弾き)」である。それぞれを学ぶ単元のタイトルは、Erstes Spiel mit schwarzen Tasten と Spiel nach Gehör である。この2つの単元を経た後に、Spiel mit Noten という、楽譜を読みながらピアノを弾いていくという従来の指導法によって学ぶことになる。

エモンツが読譜によるピアノ学習にいたるまで23ページを割いている指導法とは、「楽譜なしで弾く」方法である。これは、エモンツだけに見られる指導法ではない。以下の様々な著者による指導書や楽譜にも、明確に「楽譜を見ながら弾く」(Spiel mit Noten) と「楽譜なしで弾く」(Spiel ohne Noten) という2つの大きな柱が見える。「楽譜なしで弾く」ことを経て、「楽譜を見ながら弾く」ことに発展させていく指導法が、現代ドイツにおけるピアノ学習の初期段階における指導法の特色である。

1971年にクラウス・ルンツェ Klaus Runze(独, 1930～)は、『ふたつの手・12のキーA』(第1巻)Zwei Hände-Zwölf Tasten, Band 1<sup>9</sup>という指導書を出版している。2年後に、同じタイトルで第2巻目を出版している<sup>10</sup>。この第2巻目には、サブタイトルとして「楽譜を見ながら弾く」Spiel mit Noten と明記されている。1971年の第1巻目のタイトルには、「楽譜なしで弾く」Spiel ohne Noten と明記されていないが、内容は全く楽譜を使わない指導書である。このルンツェの指導法は、エモンツをはじめ現代ドイツのピアノ教育に大きな影響を及ぼしている。エモンツ自身、ルンツェの楽譜についての書評で、そのことを述べている<sup>11</sup>。さらにベッティーナ・シュヴェートヘルム Bettina Schwedhelm(独, 1955～)は、1996年と1998年に Klavierspielen mit der Maus. Band 1. Spiel ohne Noten<sup>12</sup>と Klavierspielen mit der Maus. Band 2. Spiel mit Noten<sup>13</sup>という、初めてピアノを学習する子供向けの指導書(楽譜)<sup>14</sup>を出版している。第1巻目のサブタイトルが「楽譜なしで弾く」Spiel ohne Noten とはっきり書かれていることに注目したい。1990年代以降に出版された、ピアノ学習初期のための指導書をみても、シュヴェートヘルムのように、「楽譜なしで弾く」指導法に1冊分はページを費やしていないにせよ、様々な「楽譜なしで弾く」方法を提示している。

## 3 Spiel ohne Noten の具体的な方法

### (1) 概観

ここで、「楽譜なしで弾く」方法について、具体的にどのような方法が提示されているのか、考察してみたい。まず、表1にあげた著者によるものをはじめとして、多くの指導書に見られる「楽譜なしで弾く」指導法には、いくつかの共通点があげられる。それらの共通点を①～⑤に分類し、以下に簡単な説明を加えている。詳しい方法については、後述する。なお、特徴を簡単に述べるために、「黒鍵奏法」と「1本指奏法」という言葉を使っている。

#### A 黒鍵奏法(まずはじめに黒鍵を認識し弾く方法)

学習者に、まずはじめに黒鍵を認識させて、黒鍵を弾かせる指導法である。黒鍵は2つのかたまりのもの(Cis, Dis)と3つのかたまりのもの(Fis, Gis, Ais)とがある。これを手のひら全体で弾いたり、こぶしを握った手で弾いたり、あるいは1本の指で弾いたりする。

#### (A の補足 黒鍵奏法の中でも、特に連弾形態のもの)

4手連弾の際のPrimoを学習者が弾き、Secondoを指導者が弾くというスタイルで、学習者はあくまで、手の

ひら全体で弾いたり、こぶしを握った手で弾いたり、1本指で弾く。

## B 探り弾き

知っている歌やメロディーを、耳の記憶を頼りに、ピアノで弾いてみる方法。曲をすらすら弾くことよりも、適切な音を探しながら弾くという過程に意味がある。

## C 一本指奏法

片方の手の第2指のみ、あるいは第3指のみを使って、簡単なメロディーを弾く方法。

## D 即興

絵を見たり、短い話を聞いたり、あるいは図形楽譜を見て、好きなようにピアノで表現してみる。

## E 作曲

絵を見たり、短い話を聞いたり、あるいは図形楽譜を見て、好きなようにピアノで表現してみる。作曲と即興とは、共通する部分が多いが、ここでは、何らかの手段で楽譜や音名で記録する作業を伴う指示が出ているものを作曲に分類する。とても短いフレーズを作ることも、作曲とみなす。

## F 図形楽譜の使用

現代音楽における記譜の影響が子供の指導書にも見られるようになってきている。音の高低の認識や、読譜や記譜への導入として用いられ、即興や作曲のために提示されている。

【表1】 現代ドイツのピアノ学習者向けの指導書（初期段階）にみられる指導法の傾向<sup>15</sup>

著者	著書名	出版年	A		B	C	D	E	F
			黒鍵奏法	黒鍵奏法 (伴奏付)	探り弾き	1本指奏法	即興	作曲	図形楽譜
Fritz Emonts	<i>Europäische Klavierschule</i>	1992	○	○	○	○	○		
Margret Feils	<i>Klavier-Spiel-Schule mit Lilli und Resa. Band 1</i>	1994	○		○			○	
Claudia Ehrenpreis	<i>123 Klavier Heft 1</i>	1995	○		○		○	○	○
Hans- Günter Heumann	<i>Piano Kids Band 1</i>	1995	○		○		○		
Bettina Schwedhelm	<i>Klavierspielen mit der Maus. Band 1</i>	1996	○	○	○	○	○	○	○
Uli Molsen	<i>Tastenspielplatz</i>	1996							
Uli Molsen	<i>Klavierschule 2000</i>	1996	○				○	○	
Alexander Nikolajew	<i>Die Russische Klavierschule. Band 1</i>	1999			○				
Anne Terzibaschitsch	<i>Tansenträume</i>	2000	○	○		○		○	
Karin Daxböck	<i>Siebzig Tastenabenteuer</i>	2001					○	○	○

・ Piano Kids は 32 頁に黒鍵を弾く伴奏付の曲があるが、楽譜を見て弾くことを前提としているので、黒鍵奏法（伴奏付）に分類しない。

表1からもうかがえるように、1990年代以降のドイツにおいて「楽譜なしで弾く」Spiel ohne Noten という新しいジャンルの指導法が定着しつつある、と言えるのではなかろうか。エモンツの *Europäische Klavierschule* が、ドイツ出版賞に選ばれたことは前述したが、表1にあるクラウディア・エーレンプライス Claudia Ehrenpreis による *123 Klavier* も、1996年に同じ賞に選ばれている。

さて、これから表1の方法を、具体的な例をあげながら、考察していきたい。ただ、「探り弾き」と「1本指奏法」は、これから述べる「黒鍵奏法」の中でも重複する部分があるので、「黒鍵奏法」を最後に述べたいと思う。

## (2) 指導法の具体的考察

### 表1のB 探り弾きについて

エモンツが Spiel ohne Noten までの指導法として重要視している方法の1つである。エモンツは、子供に「探り弾き」をさせることは、子供にとって自然な指導方法だと述べている<sup>16</sup>。「探り弾き」は、知っている曲などを「弾いてみたい」と思う、子供のとても自然な欲求に対して生じる行動である。ピアノだけでなく他の楽器でも同様だろうし、大人でも同じ欲求があるであろう。そして弾いてみたいと思うものは、よく歌う歌であったり、

テレビから流れてくる時報や鳥の声などの身の回りの音である。記憶を頼りに、目の前にある鍵盤を触りながら、音を探していく作業である。「探り弾き」においては、この“音を探す”行為に最も意味がある。完全に弾けること、曲をすらすら間違わずに弾けることが、探り弾きの目的ではない。「自らの打鍵によって発せられた音が、頭の中で鳴り響いている音（記憶にある音）と同じであるかどうか、よく聴くこと」が求められている。

表1にある著者らが、「探り弾き」の題材としてあげているのは、子供が誰でも知っている民謡等が多い。黒鍵で弾いたり、白鍵で弾いたりという方法をあげている。黒鍵での方法を提示している著者の指導法等は、「表1のA 黒鍵奏法について ③探り弾き」の項で後述する。

エモンツは、新版において白鍵で弾ける楽譜を提示しているが、探り弾きがしやすいように、まずはじめに5音内（例えばC・D・E・F・G）で、しかも指くぐりがなく弾ける曲を15曲あげている<sup>17</sup>。ドイツの民謡では、「かっこう」Kuckkuck, Kuckkuckや「冬よ、さようなら」Winteradeなどがあげられている。そして、次の段階として、5音以上からなる曲をあげている。5音内で弾ける曲は、鍵盤においた各指が1つのポジションを保ったまま弾けることが、子供にとっての導入として、適していると言えよう。1つのポジションを保ったまま弾くとは、例えば第1指はC（ハ）、第2指はD（ニ）、第3指はE（ホ）、第4指はF（ヘ）、第5指はG（ト）に置いて、まったくポジションを動かさずに弾くということである。

### 表1のC 1本指奏法について

「1本指でピアノを弾くなんて！しかもピアノの教師がそれを教えるなんてとんでもない！」と頭の固い人から、少なくとも日本では言われそうな方法である。エモンツも新版の出版にあたり強調して述べていることは、「子供がピアノに親しむ」ということである。子供の自然な欲求を満たす方法を効果的に利用しようとしている「探り弾き」を促すことも、そのための工夫である。第2指、あるいは第3指のみでメロディを弾く「1本指奏法」も同様であると考える。

「1本指奏法」で提示してある曲の多くは、伴奏つきである。この奏法も、黒鍵で弾かせる方法がとられているので、重複する部分は省き、「表1のA 黒鍵奏法について ⑥1本指奏法」で後述したい。

参考のために、「1本指奏法」に、かなり重点をおいている教本をあげたい。ソ連のウクライナ共和国で、児童音楽学校の教材として編集されたピアノ教本で、邦訳は『幼児のためのピアノ教本〔導入書〕小さなピアニスト』の上巻および下巻<sup>18</sup>である。これは、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア他、各国の有名な出版社から翻訳されている教本である。この教本においては、まず「1本指奏法」でなじみのある歌を弾くことから始まる。最初の8曲は、右手の第3指のみで弾く。その次に左手の第3指が加わる。学習する指の順番を分かりやすく、以下に簡単にかいてみた。

1. 右手第3指
2. 右手第3指 + 左手第3指
3. 右手第3指 + 左手第3指 + 右手第2指
4. 右手第3指 + 左手第3指 + 左手第2指
5. 右手第3指 + 左手第3指 + 両手第2指 + 両手第4指
6. 右手第3指 + 左手第3指 + 両手第2指 + 両手第4指 + 右手第5指
7. 右手第3指 + 左手第3指 + 両手第2指 + 両手第4指 + 右手第5指 + 左手第5指

これは、後述する「黒鍵奏法の②指の訓練について」における「5本の指をどのような順序で学習するか」の項で考察した指の学習の順番と非常に似ている。第3指は、5本の指の真ん中にあり、しかも一番長い指である。この指が安定した打鍵ができるようになり、次に第2指が加わり、この2本の指が安定すると、自然な手の形になるという考え方であると思われる。

### 表1のD・E・F 即興・作曲・図形楽譜について

即興と作曲についての区別は先に述べたとおりであるが、どちらも同じ表現活動であり、また図形楽譜はこれらの表現をするために提示されている場合が多いので、ここでは同時に考察していきたいと思う。

子供に、しかもピアノの学習を始めたばかりの子供に、即興や作曲の機会を与えることも、近年のドイツの指導書に見られる大きな特徴である。1996年にドイツ音楽出版賞を与えられているエーレンプライスの著書には、

図形楽譜を見て音を作り出す課題が、早くも10ページ目に出ている<sup>19</sup>。譜例1)

譜例 1)

10

3 Potzblitz und Donnerwetter

Überlege dir, wie sich in dieser Gewittermusik die Tonhöhe verändert!  
Spiele die Klänge von hoch bis tief - je nachdem, ob die Zeichen weiter oben oder weiter unten stehen!

Wo möchtest du mit dem rechten Pedal spielen?  
Geht die Gewittergeschichte noch weiter?!

© 1991 by Bärenkopf & Händl, Würzburg

現代音楽の様々な模索の中で生まれた図形楽譜は、1950年代から70年代初めまでに多く書かれたというが、ハンガリーの作曲家クルターク・ジョルジ Kurtág György (ハンガリー, 1926 ~) が1979年に『遊び Játékok』<sup>20</sup>という図形楽譜による楽譜を出版している。その序文において「ピアノを学ぶ第一歩から、大胆に音を出し、全鍵盤の上を走り回るようにして、ピアノを弾く喜びや動くことの楽しさを味わうことからはじめようとしている。」とクルターク自身が述べていることから、この楽譜が子供向けと断定はできないにせよ、子供を対象としていることがうかがえる。そのような点で、注目すべき楽譜である。

現代音楽における調性の喪失、また例えばケージ John Cage (米, 1912 ~ 1992) の「4分33秒」に見られるように、音楽行為そのものの捉えられ方が変化してきていること等、新しい音楽のあり方の変化が、子供の指導法にも大きな影響を与えている。従来の「調性や和声やリズム等の基礎知識」から成り立っていた「作曲」という考えが根底から覆されたことにより、「自由な発想で、やっかいな規則にとらわれずに曲を作る」ことが子供にもできるようになった。

しかし、「自由な発想で、やっかいな規則にとらわれずに曲を作る」ことは、子供が何気なくしている「遊び」そのものでもある。現代音楽における音楽観の変化と同時に、このような自然な「遊び」、そしてその行為を促すことに価値を見出すようになったと思われる。

「遊び」に価値を置くことは、「人間の自然な行動」を見直すことでもある。気分がいい時に、人は知らないうちに鼻歌を歌っていたりする。Spiel ohne Notenにおける「作曲」においては、このような“鼻歌的”に子供に短い歌を作ることを促している。「作曲」という言葉が示す範囲が極めて広がっていると考えられる。

### 表1のA 黒鍵奏法について

従来、ピアノを弾くことは、楽譜を読み、楽譜通りに弾くことだと考えられてきた。子供のピアノ学習初期段階における読譜の学習の際にもっとも一般的に使われている方法は、中央ハ音展開方式<sup>21</sup>である。しかもその際には、右手の親指(第1指)をC(ハ)の音におく方法が一般的である。最も初期段階では、右手の第1指をC(ハ)、第2指をD(ニ)、第3指をE(ホ)、第4指をF(ヘ)、第5指をG(ト)におく。同様に、左手の第1指をC(ハ)、第2指をH(ロ)、第3指をA(イ)、第4指をG(ト)、第5指をF(ヘ)におく。エモンツもSpiel mit Notenの項では、この中央ハ音展開方式をとっている。このような従来の読譜から始まる指導法に慣れた者にとっては、「黒鍵奏法」はかなり衝撃的である、とも言えよう。まず、具体的な黒鍵奏法について述べていきたい。

表1に見られるように、多くの指導書において黒鍵奏法が用いられているが、その方法は様々であり、そこからうかがえる目的も違うように思われる。次に、黒鍵奏法はどのように実践されているのだろうか。表1の黒鍵奏法を実践している指導書を取りあげ、黒鍵を用いてどのような指導法が提示されているのか、表2にまとめて

みた。

【表 2】 黒鍵奏法の実践例

著者	著書名	黒鍵奏法					
		導入	指の訓練	探り弾き	即興	作曲	1本指奏法
Fritz Emonts	<i>Europäische Klavierschule</i>	○	○		○		○
Margret Feils	<i>Klavier-Spiel-Schule mit Lilli und Resa Band 1</i>	○	○	○		○	
Claudia Ehrenpreis	<i>1 2 3 Klavier Heft 1</i>	○			○		
Hans-Günter Heumann	<i>Piano Kids</i>	○					
Bettina Schwedhelm	<i>Klavierspielen mit der Maus. Band 1</i>	○	○	○	○	○	○
Uli Molsen	<i>Klavierschule 2000</i>	○	○		○		
Anne Terzibaschitsch	<i>Tastenträume</i>		○				

### 実践例について具体的な考察

#### ① 導入的なもの

読譜による演奏を導入期のピアノ学習の第一目的にしない *Spiel ohne Noten* の指導の傾向として、まず、「ピアノに触る」ということを学習の第一段階として提示していることが多い。「ピアノの鍵盤に触って、好きなように音を出してみる」ということを促している。その際に、「低い方から高い方へ弾く」ことや「小さい音や大きい音で弾く」ことや、「ペダルを踏んで弾く」ことや「手のひらでひいたり、黒鍵の2つのかたまりの上に第2指と第3指をおいて同時に打鍵したり、あるいは1つの指で弾いたりする」ことなどを教師が提案するようにとの指示がある。これにより子供は、ピアノ全体の音の高低や、強弱やタッチの違い、ピアノの構造などに興味を持ちながら、ピアノの音を出すことができる。従来の読譜による指導法で学習する際、最初は1点ハ音の周辺のみを弾き、バイエルやツェルニーやブルグミュラー等の楽譜を学習する際でも、“は音”から“3点ハ音”までの4オクターヴ内を弾いていることになる。従来の方法では、中央のハ音の1オクターヴ内を弾いている時期に、この指導法を採用すると、ピアノの端から端までの音の響きを、制限のない弾き方で自由に楽しむことになる。シュヴェートヘルムのように、弦やハンマー等のイラストを添えて、ピアノの構造まで同時に述べているものもある<sup>22</sup>。

ここで述べている導入的な方法は、あくまでピアノに親しみ、ピアノの特性を自分の感覚を通して感じることの提案であり、指の動きなどを動かすことは含めていない。

#### ② 指の訓練

「指の訓練」という言い方は、例えばハノンのような練習的な要素を含む訓練のように聞こえるかもしれないが、ここでは、「子供が使おうと思った指をすぐに動かせる」程度のことを目的としている。ピアノ学習初期の子供に教えたことのある人であれば経験があろうが、子供にとっては、「右手の3の指でミを弾いてごらん下さい」といった指示が、大人が考える以上に難しいものである。ここでいう「指の訓練」とは、“軽い指ならし”的なものである。先ほど例にあげた「右手の3の指でミの音を弾く」指示の中には、右手と左手の判別（左右の判別）、第1指から第5指の瞬時の判断と打鍵（指の判別）、そして同じように並んだ白鍵からミを瞬時に見つけること（鍵盤の視覚的判別）といった、多くの要素が含まれている。そして、楽譜を見て弾く際には、これらの判別に加えて、読譜をするという作業が加わる。読譜においても、音部記号、五線における音符から音高と音価を瞬時に判断していくことなど、複数の情報を瞬時に処理し続けていくことが求められる。新しい指導法においては、読譜をともしないピアノを弾くという *Spiel mit Noten* にいたるまでに、*Spiel mit Noten* をよりスムーズに行うために、「指の訓練」としての黒鍵奏法が工夫されている。

まず、ほとんどの著者が、子供にとって黒鍵を認知しやすくするためであると思われるが、黒鍵の2つのかた

まり、3つのかたまりに名称をつけている。ニュアンスを訳すのは非常に難しいが、2つのかたまりを「ふたごちゃん」Zwillinge, 3つのかたまりを「三つ子ちゃん」Drillinge と呼んでいる著者が一番多い。他にもいろいろな呼び方をしているので、以下に記している。

【表3】 黒鍵の呼び方

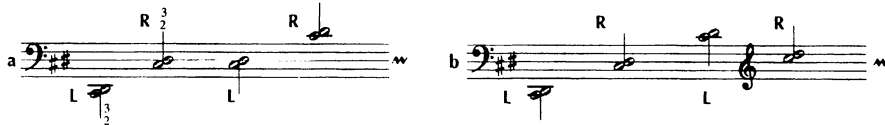
黒鍵の呼び方	使用している表2の著者
Zwillinge, Drillinge	Feils, Terzibaschitsch, Molsen <sup>2 3</sup>
Die Zweier, Die Dreier	Emonts
Die Zweiergruppen, Die Dreiergruppen	Heumann
Zwillingstasten, Drillingstasten	Ehrenpreis, Schwedhelm

「指の訓練」について具体例をあげて考察していきたいが、エモンツが*Europäische Klavierschule*の中で提示している方法を取り上げる。エモンツの実践例が、順をおっていて分かりやすく、また指導者にも分かりやすい譜例がついている。さらに同書においては、他の著者が提示しているほとんどの方法が見られるからである。

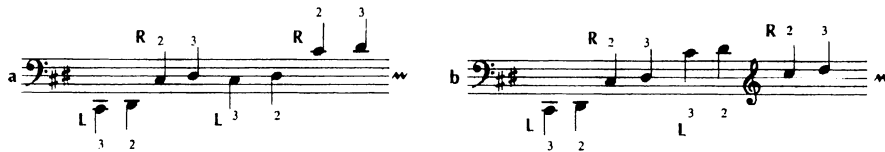
- (ア) A 2つのかたまりだけを低音域から高音域まで弾く。(反対に高音域から低音域まで) 譜例2)  
 クラスタと単音で(リズムを変えたりして弾くことも提案している。)

譜例2)

1. Cluster



2. Einzeltöne / Single Notes / Notes simples

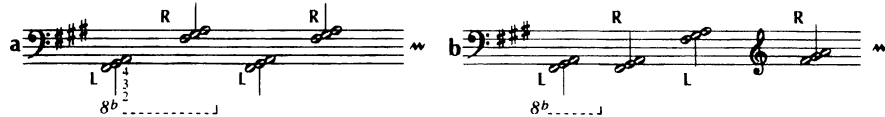


- B 3つのかたまりだけを低音域から高音域まで弾く。(反対に高音域から低音域まで) 譜例3)

その際、1と同様にクラスタと単音で(リズムを変えたりして弾くことも提案している。)

譜例3)

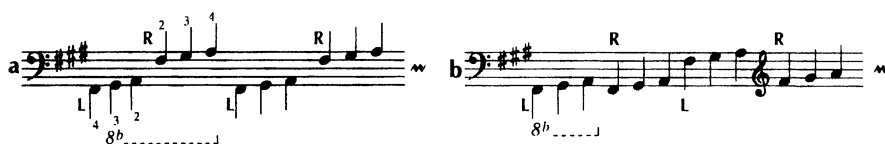
1. Cluster



Rhythmische Varianten / Rhythmic variations / Variantes rythmiques



2. Einzeltöne / Single Notes / Notes simples



Rhythmische Varianten / Rhythmic variations / Variantes rythmiques



C 2つのかたまりと3つのかたまりを交互に弾いたりする。 譜例4)

譜例4)

1. Cluster

2. Einzeltöne / Single Notes /  
Notes simples

The image shows two musical examples, 1 and 2, each with two staves labeled 'a' and 'b'. Example 1, titled 'Cluster', shows a sequence of chords in the right hand (R) and single notes in the left hand (L). Example 2, titled 'Einzeltöne / Single Notes / Notes simples', shows a sequence of single notes in both hands. Both examples include a dashed line labeled '8b' indicating an octave shift.

(イ) A 連弾の形態で、学習者が2つのかたまりと3つのかたまりをクラスターで弾く。 譜例5)

譜例5)

The image shows musical notation for 'Jumbo tanzt Walzer', 'Jumbo Dances a Waltz', and 'Jumbo danse une valse'. It includes a Primo part with fingerings (7, 1, 2, 3, 5, 3, 2, 1) and a Secondo part with two staves.

B 連弾の形態で、学習者が2つのかたまりと3つのかたまりを各指で弾く。 譜例6)

譜例6)

The image shows musical notation for 'Helle Glocken', 'High Chimes', 'Carillon aigu', 'Tiefe Glocken', 'Low Chimes', and 'Carillon grave'. It includes a Primo part with fingerings (7, 1, 2, 3, 5, 3, 2, 1) and a Secondo part with two staves.

2つ、あるいは3つのかたまりの黒鍵を和音として2本の指(第2指と第3指)、あるいは3本の指(第2指と第3指と第4指)で同時に弾くことの指示において、エモンツはクラスター Cluster という表現を用いている。Cluster とは英語で、もともと花や果実などの房、かたまり、または人や物などの群れといった意味がある。エモンツの用いた Cluster という表現は、ピアノの鍵盤を手のひらや肘、腕などで弾いたことに始まったトーン・クラスター tone-cluster という考え方と呼び方にヒントを得たのではないと思われる。1912年にカウエル Henry (Dixon) Cowell (米, 1897 ~ 1965) が、初めてクラスターを使ったピアノ曲を演奏したという。カウエルの手法は、当時大変なスキャンダルであったと伝えられるが、1960年前後には、ペンデレツキ Krzysztof Penderecki (ポーランド, 1933 ~) やリゲティ György Sándor Ligeti (ハンガリー, 1923 ~ 2006) の作品において、クラスターの手法が多用されている。エモンツは Cluster に対して、単音で弾くことは Einzeltöne という表現をしている。



### 5本の指をどのような順序で学習するか

黒鍵奏法の「指の訓練」においては、まず第2指と第3指を使う。次に第4指が加わる。最後に、第2指、第3指、第4指の両端にある指である第1指と第5指が加わる。これは、上記の例にあげた *Europäische Klavierschule* の実践例の順をおえば明らかである。読譜による弾き方では、まず第1指を使うことに始まることが多い。そして、第2指、第3指、第4指、第5指という順番で学習する。「ドの音を第1指で弾く」ことがピアノ学習のはじまりのように多くの人が思っているであろう。そのような従来の考えからは、第2指と第3指からはじめる学習は、衝撃的かもしれない。しかし、5本の指の中心である第3指と日常の手先の活動において最も使うと思われる第2指が安定した打鍵ができると、ピアノを弾く際に理想的とされる「卵を軽くにぎったような手の形」が自然にできるようになると考えられる。これは、「C 1本指奏法について」で述べた各指の学習進度に非常に似ている。

### 黒鍵奏法（連弾形態）について

上記の例の（イ）における方法は、表1で分類した「Aの補足 黒鍵奏法（連弾形態）」である。第1ピアノ（Primo）を学習者が弾き、第2ピアノ（Secondo）を教師が弾くようになっている場合が多い。この場合第1ピアノは、譜例に見られるような、クラスターで簡単なリズム等を弾く。第2ピアノに旋律が含まれている場合が多いため、2人で弾くと、まさかクラスターを弾いているとは思えないような、素敵な曲に聞こえる。第2ピアノが、嬰へ長調、あるいは変ト長調の曲を弾いていると考えればよい。第1ピアノを弾いている小さな子供は、まるで自分がすべてを弾いているような気持ちになりながら、楽しく弾くことができる。第1ピアノと第2ピアノを弾く人に教師と生徒といったような技術面での差がある場合、第1ピアノが旋律を担当し、第2ピアノが伴奏的である構成のものが、従来の形式だった。ここにみる黒鍵奏法の伴奏付の曲は、第2ピアノが旋律を担当するという、これまでの考えのまったく逆の考えである。同時に、ピアノを旋律を奏でる楽器として捉えるのではなく、打楽器的に捉えている現代音楽の流れの中での発想といえるのではなかろうか。

### ③ 探り弾き

表1にある探り弾きは、白鍵で弾くか、黒鍵で弾くかという区別はしていない。

エモンツは、探り弾きの項で、白鍵で弾ける楽譜を提示しているが、シュヴェートヘルムやファイルスは、1本指や、第2指と第3指で弾ける自作の簡単な歌詞付きの曲や、ドイツの子供達が誰でも知っている民謡等を、黒鍵で弾くことを促している<sup>24</sup>。シュヴェートヘルムは、Ringel-Ringel-Reihe や Backe, Backe, Kuchen などが黒鍵のみで弾けることを教えてくれ、子供達に弾いてみるように述べている<sup>25</sup>。黒鍵のみで弾く曲の場合は、その曲が黒鍵の5音で構成されていなければならない。5音で構成された曲を、白鍵で弾く場合と黒鍵で弾く場合を考えてみると、同じように並んでいる白鍵から5音を探すよりも、黒鍵を探す方が、視覚的に容易であると思う。

### ④ 即興

ピアノ学習初期段階の「即興」は、何の制約もなく、子供が自由自在に楽しむことを目的としている場合が多い。特筆すべきことは、エモンツが黒鍵で弾く方法は即興に適している、とモールスとの対談<sup>26</sup>で述べていることである。2つのかたまりと3つのかたまりの黒鍵の音を、5音音階の構成音とみなし、即興を楽しむことを提案している。

### ⑤ 作曲

先に述べたように、「作曲」という考えが広い意味で使われるようになってきている。ここでは、“鼻歌的に”作曲するという子供の自然な行為を促している。黒鍵を使うことは、構成音を限定することになるが、反対に構成音を限定することで、ピアノで弾くという行為が簡単になる。シュヴェートヘルムは、3つのかたまりの黒鍵で簡単なメロディを作ることを促し、記譜としては、その指番号を書くように記している<sup>27</sup>。ファイルスは、子供が喜びそうな歌詞を提示し、2つ、あるいは3つのかたまりの黒鍵を使うように指示し、シュヴェートヘルムと同様に指番号を書くように促している<sup>28</sup>。これらの記譜方法は、厳密な意味での記譜作業とは言えないが、子供に曲を作る、という表現の楽しさを与えてくれる意味で、意義深いことであると思う。

### ⑥ 1本指奏法

先にのべた「1本指奏法」を黒鍵のみ、あるいは白鍵を混ぜながら弾く。「黒鍵奏法」における「探り弾き」の項でも述べたが、小さな子供にとっては、どの音を弾くかという時に、視覚的に白鍵より黒鍵のほうが探しやすいという利点がある。②の「指の訓練」における伴奏付と同様に、1本指奏法の曲にも連弾形式になっている

ものが多い。第2ピアノが嬰へ長調、変ト長調の曲を伴奏が弾くことになる。

黒鍵奏法について、かなりの字数を費やしたが、最後に黒鍵奏法の利点をまとめると、次の通りである。

- ・ 鍵盤の並びを視覚的に把握しやすい。
- ・ 指の形を確立しやすい。
- ・ 即興演奏や作曲の導入をしやすい。

また、黒鍵の位置との関連性でC(ハ)の音の説明をしている著者が多い。例えばホイマンは、簡単に「2つの黒鍵のかたまりの左となりがCの音」と教えている<sup>29</sup>。言ってしまうと当たり前のことかもしれないが、白鍵の規則性は黒鍵によって決まっている、と言える。黒鍵がないと想像すれば、白鍵のみが並んでいる鍵盤からCの音を探す作業は大変である。

## むすび

なぜ、「楽譜なしで弾く」Spiel ohne Notenに見られるような指導法が考えられるようになったのか。大きな理由のひとつには、ピアノの学習を始める年齢が年々低くなってきている、ということのエモンツ自身が述べている<sup>30</sup>。また中村菊子氏も、アメリカの教材を中心に考察している著書の中で、アメリカにおける同じ傾向をあげている<sup>31</sup>。そのための指導法として、より効果的な方法を模索し続けているのであるが、1つの方向性として「楽譜なしで弾く」Spiel ohne Notenという新しいジャンルの指導法が確立しつつある状況である。エモンツも「母国語を学ぶときには、まず話すことを習得し、それから読むということができるようになる。」ということ为例にあげているが<sup>32</sup>、ピアノを学習するときも同じプロセスをたどることが、自然な学習法であるという考えである。

そのための指導法が、本論文で考察してきた様々な方法である。興味深いことは、指導法として提示される時、「探り弾き」や「即興表現」や「作曲」は、新しい方法であるが、これらの行為自体は、子供達が（人間が）自然に行ってきた音楽行為であるということである。小さな子供は、ピアノの鍵盤にさわると、自分が鍵盤に触れると同時にピアノから発せられる音に感動する。そして、もっともっと触ってみたいくなる。大人が聞くと、ただの騒音にしか聞こえない音に、歌をつけたり、お話をつけたり、表現の世界を広げている。従来は、これらの行動は、単なる「遊び」として捉えられ、ピアノ学習とこれらの遊びは全く無縁のものであった。しかし、これらの行動が、意味のない「遊び」としてではなく、効果的な「遊び」として捉えられるようになってきた。子供の自然な欲求による自然な行為であるからこそ、指導者が明確な指導の目的を持って接する時、子供にとっての「遊び」が、ピアノの鍵盤の規則性や、和音の構成や、ハンマーの原理を知る「遊びを通しての学習」になるのだ。

そして、ピアノという楽器の捉えられ方、音楽自体の捉えられ方が、現代音楽の流れの中で前世紀までの考えが根底から覆される程、変わってきた。これらの指導書においては、そのような現代音楽の考え方が、ピアノ学習の初期段階の子供の指導法に多く反映されていることが興味深い。

## 注

- 1 Emonts, Fritz: *Erstes Klavierspiel Band1*, Schott Musik International GmbH & Co. KG, Mainz 1958.
- 2 Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band1*, Schott Musik International, Mainz 1992.
- 3 Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band1*, Schott Musik International, Mainz 1992, S. 5.
- 4 Mohrs, Rainer: *Endscheidend die Fantasie des Lehrers. Gespräch mit Fritz Emonts über seine neue Klavierschule.* In: *Üben und Musizieren* 10, 1993, S. 12-19.
- 5 Emonts, Fritz: *Erstes Klavierspiel Band1*, Schott Musik International GmbH & Co. KG, Mainz 1958, S.3.
- 6 Hoyer, Andrea: *In der Musikschule*, Schott Musik International GmbH & Co. KG, Mainz 1998.  
Hoyer, Andrea: *In der Oper*, Schott Musik International GmbH & Co. KG, Mainz 1998. など。  
後者の絵本は日本語訳も出版されている。宮原峠子訳『ほくとオペラハウス』、カワイ出版、2001年。楽譜ではエモンツのほかにも、作曲家ルイス・ツェット Luis Zett (独, 1945-) の楽譜などの挿絵もかいている。
- 7 注6 *In der Musikschule* と *In der Oper* の2冊が、1999年のドイツ音楽出版賞 Deutscher Musikeditonspreis の「音楽に関する本」Musikbücherの部門の「教育的な本」didaktische Bücherに与えられる賞に選ばれている。

- 8 Emonts, Fritz: *Erstes Klavierspiel Band I*, Schott Musik International GmbH & Co. KG, Mainz 1958, S. 5
- 9 クラウス・ルンツェ著, ルンツェ・喜久子訳『ふたつの手・12のキー A』日本ショット株式会社, 1986年.  
原書のタイトルは *Zwei Hände-Zwölf Tasten. Band 1. Ein Buch für kleine Klavierspieler.*
- 10 クラウス・ルンツェ著, ルンツェ・喜久子訳『ふたつの手・12のキー B がくふとともに』日本ショット株式会社, 1986年. 原書のタイトルは *Zwei Hände-Zwölf Tasten. Band 2. Spiel mit Noten.*
- 11 Emonts, Fritz: Rezension von Fritz Emonts über Band II “*Spiel mit Noten*”. In: “Musik und Bildung” 8. Jahrgang Heft 1, Januar. 1976.
- 12 Schwedhelm, Bettina: *Klavierspielen mit der Maus, Band 1. Spiel ohne Noten*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1996.
- 13 Schwedhelm, Bettina: *Klavierspielen mit der Maus, Band 2. Spiel mit Noten*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1998.
- 14 ピアノ初期学習者のための楽譜は, ピアノ学習者のための楽譜であると同時に, ピアノ指導者のための指導書でもある。以後, ピアノ初期学習者のための楽譜のことを指導書という。
- 15 Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band 1*, Schott Musik International, Mainz 1992.  
Feils, Margret: *Klavier-Spiel-Schule mit Lilli und Resa Band 1*. Voggenreiter Verlag, Bonn 1994.  
Ehrenpreis, Claudia/ Wohlwender, Ulrike: *123 Klavier. Klavierschule für 2-8 Hände. Heft 1*, Breitkopf & Härtel, Wiesbaden 1995.  
Heumann, Hans-Günter: *Piano Kids*, Schott Musik International, Mainz 1995.  
Schwedhelm, Bettina: *Klavierspielen mit der Maus Band 1. Spiel ohne Noten*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1996.  
Molsen, Uli: *Tastenspielplatz*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1996.  
Molsen, Uli /Lehenseder, Mirja/Stenger-Stein, Gabriele: *Klavierschule 2000. Für Einzel- und Gruppenunterricht Band 1*, Heinlichshofen's Verlag, Wilhelmshaven 1996.  
Nikolajew, Alexander: *Die Russische Klavierschule Band I*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1999.  
Terzibaschtsch, Anne/ Buser, Regula: *Meine Allerersten Tansenträume Klavierschule für den Anfangsunterricht*, Musikverlag Holzschuh, 2000.  
Daxböc, Karin/ Haas, Elizabeth/ Schineider, Martina/ Trzeja, Rosemarie/ Weinhand, Veronika: *Siebzig Tastenabenteuer. mit dem klein Ungeheuer*, Breitkopf & Härtel, Wiesbaden 2001.
- 16 Mohrs, Rainer: Endscheidend die Fantasie des Lehrers. Gespräch mit Fritz Emonts über seine neue Klavierschule. In: *Üben und Musizieren* 10, 1993, S. 12-19.
- 17 Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band 1*, Schott Musik International, Mainz 1992, S. 21 ~ 25.
- 18 B. ミリチ編著, 寺西昭子校訂・監修『幼児のためのピアノ教本〔導入書〕小さなピアニスト 上巻』, 1987年第1版, 1997年第1版第6刷, 全音楽譜出版社。  
B. ミリチ編著, 寺西昭子校訂・監修『幼児のためのピアノ教本〔導入書〕小さなピアニスト 下巻』, 1987年第1版, 1998年第1版第5刷, 全音楽譜出版社。
- 19 Ehrenpreis, Claudia/ Wohlwender, Ulrike: *123 Klavier. Klavierschule für 2-8 Hände. Heft 1*, Breitkopf & Härtel, Wiesbaden 1995, S.10.
- 20 クルターク・ジョルジイ著, 中川弘一郎、ロナルド・カヴァイエ共訳『遊び I [ピアノのために]』, 1989年第1版, 1997年第1版第4刷, 全音楽譜出版社。
- 21 中村菊子氏が著書において中央ハ音展開方式という言葉を使っている。  
中村菊子『ピアノレッスン 世界のレッスンとレパートリー』, 1997年初版, 1999年第6版, ヤマハミュージックメディア, 71頁。
- 22 Schwedhelm, Bettina: *Klavierspielen mit der Maus Band 1. Spiel ohne Noten*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1996, S. 6-7.
- 23 モールセンの以下の著書には, Zwillinge, Drillinge という言葉は, ドイツの作曲家であり音楽教育家であるペーター・ハイルブート Peter Heilbut が使った言葉の引用である, と説明が加えられている。  
Molsen, Uli/ Lehenseder, Mirja/ Stenger-Stein, Gabriele: *Klavierschule 2000. Für Einzel- und Gruppenunterricht Band I*, Heinlichshofen's Verlag, Wilhelmshaven 1996, S.9.
- 24 シュヴェートヘルムは, 「かたつむりの歌」 Schneck-Lied をとりあげている。  
Schwedhelm, Bettina: *Klavierspielen mit der Maus Band 1. Spiel ohne Noten*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1996, S. 10.
- 25 Feils, Margret: *Klavier-Spiel-Schule mit Lilli und Resa Band 1*. Voggenreiter Verlag, Bonn 1994, S. 29-31.
- 26 Mohrs, Rainer: Endscheidend die Fantasie des Lehrers. Gespräch mit Fritz Emonts über seine neue Klavierschule. In: *Üben und Musizieren* 10, 1993, S.12-19.
- 27 Schwedhelm, Bettina: *Klavierspielen mit der Maus Band 1. Spiel ohne Noten*, Musikverlag Hans Sikorski, Hamburg 1996, S. 13.
- 28 Feils, Margret: *Klavier-Spiel-Schule mit Lilli und Resa Band 1*. Voggenreiter Verlag, Bonn 1994, S. 15.

- 29 Heumann, Hans- Günter: *Piano Kids*, Schott Musik International, Mainz 1995, S. 12.
- 30 Mohrs, Rainer: *Endscheidend die Fantasie des Lehrers*. Gespräch mit Fritz Emonts über seine neue Klavierschule. In: *Üben und Musizieren* 10, 1993, S. 12-19.
- 31 中村菊子『ピアノレッスン 世界のレッスンとレパートリー』, 1997年初版, 1999年第6版, ヤマハミュージックメディア, 68頁.
- 32 Mohrs, Rainer: *Endscheidend die Fantasie des Lehrers*. Gespräch mit Fritz Emonts über seine neue Klavierschule. In: *Üben und Musizieren* 10, 1993, S. 12-19.

### 譜例

- 譜例 1) Ehrenpreis, Claudia/ Wohlwender, Ulrike: *123 Klavier.Klavierschule für 2-8 Hände. Heft 1*, Breitkopf & Härtel, Wiesbaden 1995, S.10.
- 譜例 2) Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band 1*, Schott Musik International, Mainz 1992, S. 8.
- 譜例 3) Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band 1*, Schott Musik International, Mainz 1992, S. 9.
- 譜例 4) Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band 1*, Schott Musik International, Mainz 1992, S. 10.
- 譜例 5) Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band 1*, Schott Musik International, Mainz 1992, S. 11.
- 譜例 6) Emonts, Fritz: *Europäische Klavierschule Band 1*, Schott Musik International, Mainz 1992, S. 13.